vol.584

"高品質、低価格、情報はマック"
THE MAC JOURNAL
三菱商事アグリサービス株式会社

◆ 2021年2月24日発行ラインナップ
・肥料物流における合理化検証始まる
・三菱グループの守り神
土佐稲荷神社を訪ねて

肥料物流における合理化検証始まる

農水省は昨年4月1日に肥料の物流合理化における中間取りまとめを発表している。これに関連して令和2年度補正予算において産地生産基盤パワーアップ事業の新市場獲得対策（新市場対応を支える物流体制の革新）の事業実施主体を公募した（既に2月2日時点で公募は締切）。https://www.maff.go.jp/j/supply/hozyo/seisan/210112_376-1.html

流通合理化対策事業とは、労働環境変化に伴う肥料の流通合理化を図るため、肥料の製造・流通事業者が連携し、一貫パレチゼーションの確立を目指す取組みだ。検討委員会は全肥商連の山森会長が座長となり、農水省生産局、全農、肥料メーカー団体は日ア協、全複工、生産者の代表として日本農業法人協会の委員がメンバーで構成され令和元年12月27日より検討開始された。肥料の多くはトラック輸送が主体にて商系出荷の場合は荷主手配、系統出荷の場合は肥料メーカーより運送会社に依頼し輸送されている。ただ、昨今では肥料運搬は荷揚げ荷下ろしの際に「手積み・手卸し」といった重労働となるため敬遠されてしまうケースが発生しており、流通の合理化が行われないと肥料物流そのものが成り立たなくなる恐れがある。また、出荷のピークは主に肥料を使用する直前の早春に配送が行われる商習慣がある。近年では当用期の出荷需要が年々強くなっており、早春の肥料工場では肥料を積み込むまでにドライバーが長時間待機を強いられるといった積込渋滞も発生している。運送会社としては待機時間もドライバーの労働時間に含まれるため運賃の値上げを発注者に求めるケースもある。ただし、肥料メーカーにだけ物流の合理化を求めるのには無理もある状況下にある。肥料メーカー各社は積込渋滞を発生させないためにパレット付の肥料価格を提示したり、工場引取り時の入場時間を事前に取決めしたり、荷渡し時に反転フォークリフトの導入等で積込渋滞をなるべく回避するような工夫を進めている。肥料のコストの約7割は原材料費で占められており、メーカーだけに自助努力を一方的に強いても肥料メーカーの立場からすれば肥料価格低減に協力しているさなかにこれ以上の余力はもはやない状況になっている。

業界全体で改善点を共有し足並みを揃えなければうまくいかない事は周知の事実であった。今回の公募された検証目的は、ICタグを埋め込んだパレットの活用、RFID（※）等の出荷記録管理と帰り荷での無選別回収がうまく回るのか？事業として成立するのか？というのが検証内容となっている。当社でもICチップを埋め込んだパレットを生産するメーカーに現状を伺った事がある。ICタグを埋め込んだパレットはレンタル代だけでも高額となっており、利用度が頻繁且つ拡大すればレンタルフィーは下がるのであろうが、肥料の利用時期が春に集中すること、資材単価の低い物では高額なレンタル代支払いは現実的に使い切れないのではないかという意見があった。現在のICタグを埋め込んだパレットの利用者は医療機器等の高額な商品を積む程度のニーズ位しか利用度はないようだ。また、物流面において肥料運送で使用したパレットの回収率は決して高いとは言えず100％回収拠点に戻ってくる事はほぼない状況下にある。地方に出張した際にどこから流れ着いたのか、といったところにパレットが放置されているケースも目の当たりすることもあり、心を痛めたという供給側の体験談も耳にする。また、荷主のパレットであれば問題ないのだが運送会社によっては積み替えの手間を省くべく持ち込む際に使用したパレットは肥料をそのまま積んで置いていき、代替えとして他のパレットを持ち帰るケースもある。パレット利用者はパレットが誰かの資産であるという観念が欠如している処にも利用者の意識改善が求められよう。この問題解決が容易ではなかったことで肥料メーカー等は率先して合理化を進めたくても出来なかった理由のひとつではないだろうか。パレットではないが、モッコベルトは期間を定めて最終利用者が肥料メーカーに返還しなかった場合、請求するといった取組も一部ではなされているが、肥料メーカーにはその請求処理作業負担を強いる事にもなっている。

（次ページへ続く）

(前ページより続く)
このような様々な課題や問題を乗り越えていきつつ、肥料物流の合理化が構築されていく事を期待したい。

※RFIDとは？　RFIDとは、Radio Frequency Identificationの略で、 非接触型のスキャンシステムを指す略語。 商品にバーコードではなく、電子情報が記憶された「RFタグ」を貼り付け、 専用の読み取り機器で電子情報を読み込む事ができる。

三菱グループの守り神　土佐稲荷神社を訪ねて

大阪市に三菱グループの守り神の神社があると聞いて訪ねた。場所は、地下鉄千日前線・長堀鶴見緑地線の「西長堀駅」から徒歩数分のところにある土佐稲荷神社がそうだ。隣はマンション等が多く立ち並び神社はその中に佇んでいる。神社創建の由来は不詳であるようだが、土佐藩の大坂蔵屋敷に隣接する長堀川(現在の長堀通)鰹座橋の畔に鎮座していたと言われている。創建は天正年間(1573年-1593年)とも伝えられているが、明和7年(1770年)に土佐藩第6代目藩主山内豊隆が京都の伏見稲荷から稲荷大神を勧請し西蔵屋敷に本殿を建立して土佐稲荷神社として広く信仰を集めるようになったと言う。また、いつの頃からか川を挟んだ北側に土佐藩開成館(大阪商会)が設立され、そこにあった石宮神社は稲荷神社に合祀されたようだ。山内氏は社殿を造営して蔵屋敷の鎮守社とし、土佐藩邸、蔵屋敷の守護神として崇められ、山内家は参勤交代で大坂を通る際には必ず立ち寄り参拝するようになったと伝えられている。明治初年、廃藩置県後、藩営事業を継承した岩崎彌太郎が明治2年に大阪商会の責任者として赴任。翌3年に明治政府の藩営事業禁止令に先立ち、彌太郎の監督の下、九十九商会を設立。事業を引継ぎ、海運業を中心に営業を開始した。その後、明治6年、三菱商会へと改称、彌太郎は社主として経営していきます。翌7年に本社を東京に移した後は、三菱商会跡地は大阪市に譲渡され、現在の西区役所となっています。しかし、土佐稲荷神社だけは手放さなかったようだ。東蔵屋敷は昭和12年に西華女学校移設地の請願があり大阪市に譲渡されたが、現在はマンションが建っています。昭和20年3月の大阪大空襲により、神社はその全てが焼失してしまいましたが、それまで後ろ盾となっていた岩崎家の後を受け継いだ三菱グループの支援により徐々に復興され平成5年に本殿、平成21年には社務所が再興され現在に至っている。神社には彌太郎の弟の岩崎彌之助が寄贈した青銅の狛犬があり、その台座に銘文が書かれている。「予が宗家の別邸浪華に在り。もとは土佐候に係る。別邸の内に稲荷社有りて相伝う。神徳威霊祈祷すれば必ず験有り。其名府下に轟く。萱堂(わが母)常に之を崇奉す。年を閲するの久しき、祠堂朽壊せり。困って之を新ためんと欲す。胞兄彌太郎君、乃ち経営する所ありしも、未だ果たさずして没せり。予、其遺志を継ぎて、之を改築せり。神徳威霊を加うるを覚ゆ。是に於て、遠近より来り賽するもの日に盛んに月に庶し。頃、萱堂物を献じて、其の志を慰むと云う」この神社を信仰すると、ご神徳が顕であると書かれており、岩崎家の並々ならぬ信仰の篤さがわかる。境内は江戸時代より桜の名所としても有名で、大阪大空襲により全焼したが、若木が植えられ桜の名所として復活した。コロナ禍で今年のお花見も例年のようにはいかないでしょうが、開花が待ち遠しいですね。(大阪支店)

春一番が吹いたと思えば寒の戻りで冬の陽気。それでも花粉は待ってはくれません。くしゃみをするのも憚られるコロナ禍ですので、花粉症なのも肩身が狭いですね。

編集事務局：南部、助川
電話：03-5275-5511/E-mail： macjournal@mcagri.co.jp　URL http://www.mcagri.jp